たまのよこやま

発行
(財)東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206-0033
多摩市落合1—14—2
☎ 042-373-5296

東京都埋蔵文化財センター報 No.43 平成10年6月30日 http://www.tef.or.jp/maibun/

今年度の展示風景　ホール中央に縄文時代の竪穴住居が復元され臨場感をかもしだしている。例年、4・5月には小学生の社会科授業でにぎわう。

「居は気を移す」

副主任調査研究員　小薬　一夫

今年度の展示は、「住まいの移りかわり」をテーマにしました。展示場の入口に、縄文時代の住居を原寸大で復元し、住居内の様子を再現するとともに、発掘調査によって明らかにされた各時代の住居の移りかわりを展示しました。

海浜部と山間部、丘陵地と平野部などで住居形態が異なるのは、それぞれの地域の自然環境や歴史の中で培われてきた生業活動に、合目的的に造られてきたためです。それだけに狩猟や採集あるいは農耕生活に限らず、住居には日常の暮らしが色濃く反映されてきました。

ところが現代の住居ときたら、核家族単位で見栄え優先の画一的なもの、しかも悲しいかな、住宅ローンの支払いに窮々しているのが実状です。地域コミュニティーの希薄化とともに、三世代同居が珍しくなった昨今、人間が社会生活を営む本質として、伝統的な住まいを見直したいものです。

「より良い住まいは、より良い人間を形成する」といわれますが、今や失われてしまった感のある住まいの原点とは何か、今回の展示から読み取っていただければ幸いです。

遺跡だより㊺①

代継・富士見台遺跡は、東京都の西部のあきる野市で、多摩川支流の秋川と平井川に挟まれた東西に長い秋留台地の、南側縁辺にあります。付近には縄文時代草創期の石槍が大量出土した前田耕地遺跡や西秋留石器時代遺跡（国史跡）が、反対側の秋留台地北縁には、瀬戸岡古墳群と三吉野遺跡群があります。

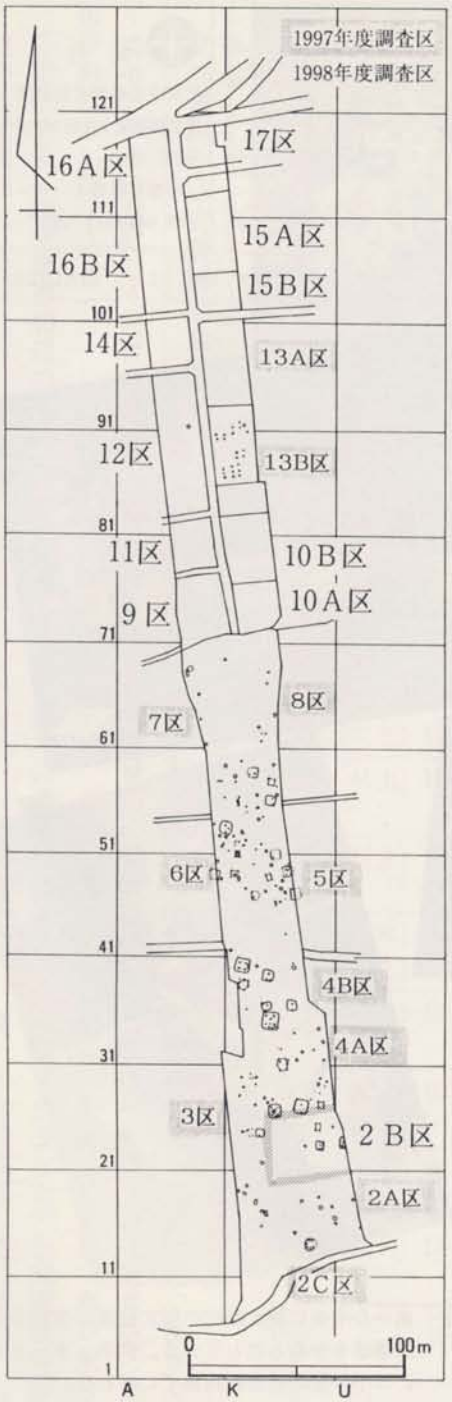
本遺跡は、その三吉野遺跡群と同じく、圏央道の建設により昨年四月から発掘調査しているものです。調査範囲は道路幅が40ｍで、長さは秋川に面する崖線から内側600ｍにわたっています。崖線に沿っては都道3・3・3号線が建設されるため、あきる野市代継・富士見台遺跡調査会が別途調査しており、本調査とトレンチが十字状に直交する恰好になっています。

今回の調査では、立川ローム層上部に含まれる旧石器時代の遺物集中地点が2カ所をはじめ、縄文時代早期の炉穴、前期末の土器埋設土坑、中期中葉の住居跡等が検出されています。注目すべきは、やはり中期中葉と考えられる集石土坑で、15基も検出されたことです。西多摩地域に特有の遺構で、多いもので5千～1万点以上の焼礫がびっしり詰まっています。この遺構がどういう用途で構築されたものか、その性格が取り沙汰されています。

さらに、古墳時代前期初頭の竪穴住居跡が18軒、掘立柱建物跡が5棟、土坑が26基、用途不明ピットが多数検出されました。土器のほかには金属製品、石製品、土製品が出土しています。同時期の遺構群は都道側でも多数検出されていますので、かなり大規模な古墳時代の集落だったようです。

近世以降は、都道の調査区東側から竪穴状遺構や石敷の道路跡が検出されています。これからは、各時代の遺構の広がりと土地の利用状況を復元するよう、調査に努めていく用意でいます。

（小坂井　孝修）



調査区全体図

映画「汐留遺跡」できる

平成四年度に始まった汐留遺跡の調査も今年度で七年目、この間、当センターでは東京シネビデオ株式会社に委託し、発掘の折々を16ミリフィルムで映像記録してきました。

蓄積されたその膨大な映像を基に、このほど映画「汐留遺跡――江戸大名屋敷から文明開化へ」（大西竹二郎監督・上映時間30分）が、当センターの監修、東京シネビデオ株式会社の製作により完成しました。

映画は、海浜部埋め立ての土木技術、生活物資を搬入する大規模な石組の船入場、江戸時代の地震を証明する液状化現象の痕跡、上下水道や大名屋敷のトイレ事情、大量に出土した陶磁器類や動物の骨の謎、そして文明開化への移り変わり等で構成されています。

これまで、江戸遺跡への一般の方々の関心は、主に遺跡見学会や展覧会を通して得られてきたことでしょうが、この映画を鑑賞することで、いっそう高まるものと思います。

なお、この映画は、同時にビデオ化もされており、中央図書館・日比谷図書館・多摩社会教育会館のフィルムライブラリーに寄贈してあります。どうぞご利用ください。

文化財講座 〈33〉
大江戸掘りもの帖 ～其十～

会津藩保科家屋敷の拡張

汐留遺跡で、保科家屋敷の北東側の発掘調査を行ったところ、その最下層から、竹を使った土留め施設（しがらみ）が、狭い範囲で幾条も見つかり、中には同じ場所で重なり合うように作られた箇所もありました。

伊達家や脇坂家の屋敷の調査で見つかった土留め施設には、竹を使ったもののほか、石を使ったもの（石垣）、板を使ったもの（板柵）、筵などで土砂を積み上げたものなどがありましたが、広い範囲に整然と作られていました。

今回の調査で見つかった土留め施設は、すべて竹を使ったもので2種類あります。一つは、杭に竹を絡ませる構造で、もう一つは、杭の後ろ側に簾状に竹を並べる構造でした。さらに、土留めと土留めの間は、多量の木製品や陶磁器を含むゴミ層でした。

調査を行った場所は、延宝四（1676）年に東側の空地火消人足小屋として借用し、その翌年、屋敷地として拝領した地域の一部にあたります。『家世實記』の延宝四年の項には、「小屋地御望之通被成御貸候、併御拝領地ニ無之故、御屋敷奉行衆へも地面相渡候様ニと差図無之候間、土塁之義石垣者被成御無用しからミ杯ニ而可燃候…中略…且海手之方空塵芥捨候而、連々埋候所少々地形不繕立候而者、時ニ寄水つき小屋掛候事難成在之、…」と記されています。

要約すると、火消人足の小屋として借用するに際し、拝領地ではないので、土留めを石垣でなくしがらみ（竹）で工事するよう命じられた。その場所は、塵芥が捨てられて段々と埋まっており、地形が不揃いで波を被ることもあり、工事が難航した……というものです。

文献史料との対照から、ゴミ層の形成が、延宝四年以前ということが明らかになりました。ゴミが堆積してできたこの場所は軟弱で、土留め工事が難航し、何度か作り直されたことが、写真からも窺えるでしょう。

江戸時代の遺跡では、文献史料と発掘調査の情報を比較対照することで、遺跡内容をより具体的に理解することができます。本例は、まさにそうした情報が活かされた好例といえます。

（小林　裕）

保存科学室こぼれ話 (七)

赤色顔料について (1)

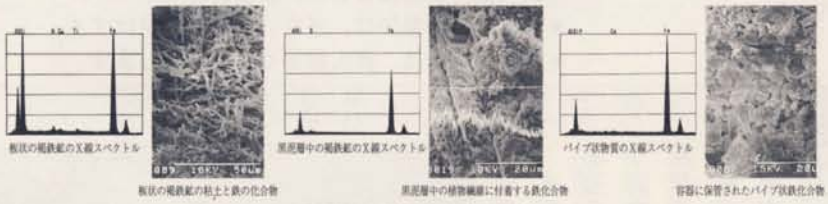
遺跡を調査すると、時として遺構や遺物に赤い物質を見ることがあります。考えられる赤い物質の母材としては、身近なところで酸化鉄、生産地が特定されるものとして水銀朱、鉛丹があります。ここでは酸化鉄とその母材の関係を考えてみます。

酸化鉄から生成された赤色物質は一般的にはベンガラと呼ばれ、赤鉄鉱に700度ほどの熱を加えて精製されたものといわれます。

見城敏子等の研究（1988）によれば、縄文時代から古墳時代にかけてのベンガラに、パイプ状物質を含むものと含まない2種があるとされています。

それではパイプ状物質を含まない赤色物質の母材、精製法は如何なるものなのか、採取した試料で実験してみました。一つは、沼地や黒泥に近い場所の褐鉄鉱、もう一つは、火山灰と粘土層の境に生成される、高師小僧などの板状の褐鉄鉱です。これを電気炉の温度計で赤色変化を見るとともに、走査型電子顕微鏡とエネルギー分散装置、X線回析などで分析してみました。

その結果、400～500度でパイプ状物質に近い赤色物質が得られましたが、さらに、沼地に近い場所の褐鉄鉱は、温度上昇により有機物が消滅して酸化第二鉄に変化し、植物繊維（珪素）が見られることもあります。板状の褐鉄鉱は、粘土鉱物が共存した酸化第二鉄となり、パイプ状物質は含まれないことが分かりました。次回は、これらの用途例の違いを報告します。（上條朝宏）



酸化鉄から精製された赤色顔料

縄文土器の野焼き

毎年、五月の連休に行っている縄文土器の野焼きですが、雨に祟られて三日の予定が四日に順延しました。

センターの同好者銘々が競って作り上げた土器とともに、一般の方の持ち込みもあり、盛況でした。またこの土器を、展示ホールの脇に展示して、出来ばえをご覧にいれました。

文部省科学研究費補助金の交付

当センターの左記の4名に内定通知がありました。

千野　裕道「縄文集落周辺の植生に関する研究」

福嶋　宗人「12世紀中頃の陶磁器の流通と木器の生産、使用を考える」

松崎　元樹「『東大寺献物帳』記載の黒作大刀・黒作横刀に関する考古学的研究」

及川　良彦「低地に適応した居住形態についての研究」

平成10年度広報普及事業のご案内

日　時	行事名	内　容
5/ 3(日) 10:00～14:00	縄文土器の野焼き 雑穀の種まき	縄文土器の焼成の実演（参観自由） 庭園でアワ・キビ・ソバ等を作付け
6/13(土) 13:30～16:00	学校週5日制対応	映画「越後奥三面」
6/27(土) 13:00～16:00	学校週5日制対応	映画「越後奥三面　第2部」
7/ 4(土) 13:30～16:00	第1回講演会	演題「発掘から見た大名屋敷のくらし」 講師　内野　正（都埋文センター　副主任調査研究員）
8/ 1(土) 13:30～16:00	第2回講演会	演題「住まいの移りかわり－竪穴住居から掘立柱建物まで」 講師　小薬一夫（都埋文センター　副主任調査研究員）
8/20(木)・21(金) 9/12(土)	縄文土器作り教室 定員30名	詳細は「広報東京都」等に掲載の予定。 応募者多数の場合は抽選になります。
10/ 3(土) 13:30～16:00	第3回講演会	演題「氷河時代狩猟民の住まいとくらし」 講師　小野　昭（東京都立大学　教授）
11/ 7(土) 13:30～16:00	第4回講演会	演題「狩猟採集民の季節の住まい」 講師　山本典幸（國学院大学　特別研究員）
1/23(土) 13:30～16:00	第5回講演会	演題「古代末期の住まいとくらし－落川遺跡の調査から」 講師　福田健司（東京都教育委員会　学芸員）
2/13(土) 13:30～16:00	第6回講演会	演題「原始古代の木製容器」 講師　飯塚武司（都埋文センター　副主任調査研究員）

＊講演会の会場は、東京都埋蔵文化財センター会議室です。
＊講演会・映画鑑賞会は、参加費が無料です。
＊講演会への参加は、当日、会場で受付けます。
＊遺跡見学会は、都広報等でお知らせします。

分室の開設

この五月一日付けで、あきる野市の都道秋多3・4・6号線の建設に伴う調査がはじまり、瀬戸岡分室が開設されました。小林重義係長（兼務）と今井恵昭・金持健司・松崎元樹副主任調査研究員が従事します。

また、六月一日付けで、多摩市の都道多摩3・4・19号線の建設に伴う調査がはじまり、東寺方分室が開設されました。上條係長（兼務）と鶴間正昭・岩橋陽一・竹花宏之副主任調査研究員が従事します。

あきる野市の都道の調査

人のうごき

三月三十一日付けで川島春夫所長が勇退し、その後任として、教育庁総務部企画室予算担当課長鈴木雅久が就任しました。

また、都嘱託員の古川耕一が雇用期間を満了、替わって竹元隆豊が採用されました。